

初級レベル学習者のための「防災・文化学習」の体験型短期留学プログラムの試み

—日本人学生との協働を通してのハイインパクト・プラクティス実践—

A Short-term Japanese Language and Culture Program for Beginners Incorporating Disaster Prevention Studies: The Implementation of *High Impact Practices* by Establishing Learning Partnerships with Native Japanese Students

尹郁子・越山泰子・飯島有美子（関西国際大学）

YUN Ikuko, KOSHIYAMA Yasuko, IJIMA Yumiko (Kansai University of International Studies)

要 旨

本稿は、George D. Kuh（2008）の提唱する集団的・能動的な実践学習を奨励する「ハイインパクト・プラクティス（H.I.P）」を援用し、大震災の教訓や地域性を活かした日本語・日本文化短期留学プログラムの実施報告である。アンケート結果によると、留学生はプログラムが進行するにつれて、防災・文化体験を通して日本の現状を認識し、新たな知見を得たと感じていた。また日本の学生においては、留学生との協働学習に参加することで、外国人とコミュニケーションをとる難しさを感じつつも、それ以上に文化の異なる学生と交流する楽しさを実感していた。

This report describes a short-term Japanese language and culture program incorporating disaster prevention studies. The program design is based on High Impact Practices by George D. Kuh (2008) which highlight collaborative and active learning experiences to enhance learning. By participating in this program, students learning Japanese felt that they became more aware of current situations in Japan. On the other hand, Japanese college students appreciated their cross-cultural experiences, although they found difficulty in communicating with the foreign students.

【キーワード】 防災学習，日本文化学習，体験学習，ハイインパクト・プラクティス

1. はじめに

近年、国際化，グローバル化が進み，各国の留学生が国境を越えて盛んに行き来するなか，東日本大震災後の日本への留学生は減少し，また国内の若者の海外留学も2005年以降減少を続けており，内向き傾向が危惧されている。

関西国際大学（以下，本学）では，国際的にユニバーサル化が進む高等教育下の日本語学習者と内向き志向の日本人学生の両方にインパクトを与えることを目的とし，初級の日本語学習者に「日本文化学習」，「防災学習」を通して現実社会とのつながりを感じさせる3週間の日本短期体験型留学プログラムを実施した⁽¹⁾。本稿では，その実践教育内容，方法，学習成果，さらに事前，中間，事後に行ったアンケート調査について報告する。

2. 体験型短期留学プログラムの実施背景

2-1 背景

世界のさまざまな地域で高等教育が発展している反面，多様な学生を受け入れる必然性

も高まり、学習効果を上げるために従来高等教育で行われてきた講義式以外の授業方法が必要とされつつある。また社会の情勢もめまぐるしく移り変わり、特に2011年の東日本大震災が留学生に与える影響も、教育の国際化の観点からも決して無視できるものではない。

これらを踏まえて、本学では、学習者の多様性と社会の変化への対応に取り組むべく、1995年の阪神淡路大震災の教訓や地域性を活かした日本語や日本文化・社会についての理解や興味を向上させる短期留学プログラムを実施することになった。本プログラム実施にあたっては、George.D.Kuh(2008)の提唱する集団的・能動的な実践学習を奨励する「ハイインパクト・プラクティス(H.I.P)」を援用し、日本についてあまり学習の機会がなかった海外の学生を対象に、「防災・文化学習」を中心とした体験型プログラムを実施した。

2-2 プログラムの目的

海外では体験をベースにした日本語や日本文化の授業は難しいため、教科書を中心とした授業を行わざるを得ないが、実際の日本を理解するには、単一的になりがちである。

今回のプログラムでは、「関西弁」「ポップカルチャー」などの教科書では学ぶことのできない日本語や日本文化の多様性を知る「体験学習」と、兵庫県が持つ震災体験を活かした「防災学習」、さらに日本の大学生との「協働学習」を中心にカリキュラムを組んだ。参加者は高度な日本語での活動が難しい初級学習者であったが、ハイインパクト・プラクティスを援用した独自のプログラムを組むことにより、学習効果を上げることを狙った。

ハイインパクト・プラクティスとは、体験によるインパクトが学習意欲向上につながると期待される初級学習者を対象に、多様性理解(Diversity/Global Learning)、調査(Undergraduate Research)、課題やプロジェクトでの協働(Collaborative Assignments and Projects)などの能動的な教育実践を複合的に組み込み、構造化することによって、学習成果や学習者の心理的な成長・態度・価値観などに強い影響を生み出す教育プログラムの総称である(Kuh, 2008)。この教育手法を用いた今回のプログラムの内容を具体的に述べると、大きく分けて4つある。

1) 「若者ことば」「関西弁」を含むさまざまな日本語コミュニケーションのための指導を通して、学習者の日本語学習への興味を引き出す。

2) 「防災学習」を通して日本についての最新の情報を提供し、またそれについて自らの目で見たり調査したりして、東日本大震災後の日本の社会についての理解を深める。

3) 着物や華道などの「伝統文化」から、アニメ、ファッションに見られる「ポップカルチャー」、ひいては京都、大阪、神戸の「関西文化」に触れ、またそれについて調査し、日本の多様性についての理解を促す。

4) 自ら選択したテーマについて、留学生4人、日本人学生1~2人の1グループで調査を行う。日本人学生と留学生間における協働を通して、参加者が自ら体験しながら学生主導の学習を行い、双方の国際観を広げる。

3. プログラム実施概要

3-1 クラス概要

授業科目名：日本事情Ⅰ(2単位)、日本事情Ⅱ(2単位)

実施期間：2012年1月～2月にかけての3週間

授業時間数：1日2コマ（1コマ90分）×15回、計30コマ

学習者：本学海外協定校から23名（中国10名、台湾8名、韓国3名、アメリカ2名）

日本語レベル：初級

使用教材：『日本語ドキドキ 体験交流活動集』国際交流基金関西国際センター

『クロスロード（市民編）』 矢守克也他作より簡易日本語リライト版作成

『避難所シミュレーションゲーム』筆者ら作成

「地震」『中級へ行こう』スリーエーネットワーク

日本人学生サポーター：ボランティアとして留学生をサポートし、課題と一緒に取り組む学生を学内で募集し、その中から選ばれた17名

3-1-1 授業内容の展開とスケジュール

本プログラムは、「日本事情Ⅰ」と「日本事情Ⅱ」で構成され、15コマずつの計30コマで、各2単位計4単位が付与される。授業の内容は、大きく2つに分かれており、「文化学習」、「防災学習」である。それらの授業を通して、日本語コミュニケーションの指導も行う。表1に本プログラムのスケジュールを示すと、以下のようになる。なお、表中の[テキスト]とあるのは、『日本語ドキドキ体験交流活動集』のことである。

表1 短期留学プログラムのスケジュール

	日付	日本事情Ⅰ（2限）	日本事情Ⅱ（3限）
1回	1/17(火)	オリエンテーション	シラバス説明・キャンパスツアー
2回	1/18(水)	自己目標作成・活動記録 [テキスト p122-126]	『クロスロード』(前)
3回	1/19(木)	交流会 [テキスト p31-38, p52]	「地震」『中級へ行こう!』 p14-24
4回	1/20(金)	ご近所オリエンテーリング [テキスト p15-22]	交流会（食堂）
5回	1/23(月)	伝統芸能(ビデオ学習)	日本文化体験（華道）
6回	1/24(火)	フィールドトリップ [テキスト p53-57]	人と防災未来センターでの調査
7回	1/25(水)	アニメ・マンガ [テキスト p150-151]	ポップカルチャー見学
8回	1/26(木)	インタビュー [テキスト p63-69]	兵庫県三木総合防災センター見学
9回	1/27(金)	関西弁 [テキスト p144-145]	防災体験（ハンガー目玉焼き）
10回	1/28(土)	京都訪問(着物体験)	京都半日フィールドトリップ
11回	1/30(月)	避難所シミュレーション	『クロスロード』(後)
12回	1/31(火)	若者ことば [テキスト p146-147]	日本文化体験（書道）
13回	2/2(木)	発表準備 [原稿作成]	発表準備 [パワーポイント作成]・発表練習
14回	2/3(金)	発表リハーサル	グループ発表
15回	2/6(月)	自己評価	修了式・お別れ会

3-2 プログラム内容

本プログラムは、日本文化についての学習・体験のパートと防災についての学習・体験のパートと2つに分かれている。以下それぞれについて説明し、協働学習の課題（プレゼ

ンテーション発表)の手順についても説明する。

3-2-1 文化についての学習・体験パート

まず、学習者が本プログラムで学んだり、体験した日本文化について、グループでプレゼンテーションを行うという最終課題を設定し、そのために必要な学習内容を組んだ。さらにその学習が日本人学生サポーターとの協働によって、より深まるように設計した。

具体的には、学習者は3、4人のグループになり、各グループは課せられたテーマ「地震、アニメ、マンガ、日本の伝統芸能、日本の料理、ポップカルチャー、若者ことば、関西弁、尼崎市、日本の文化、日本の学生、日本のファッション」から1つ選択する。選択したテーマについて、講義を受けるとともに、フィールドワークや調査を行い、最終的にはクラスでプレゼンテーションを行う。これらの活動をサポートするために、各グループに日本人学生サポーターが2、3人配される。学習者と日本人学生サポーターには、クラス時間に顔合わせを行った後は、各自が連絡を取り合い、予定を決めるように指示した。

3-2-2 防災についての学習・体験のパート

ここでは、大きく4つの活動を設計した。①地震発生時の避難について知識を得る、②地震等の災害についての施設で見学や体験をする、③被災者になったことを想定しシミュレーションゲームを行う、④身近にあるものを工夫して被災時に活用する、である。

①の「地震発生時の避難について知識を得る」ために、日本語テキスト『中級へ行こう』から「地震」の章を用い、地震が発生した時、まず自分の身を守るにはどうしたらよいかを考えた。

②の「地震等の災害についての施設で見学や体験をする」では、2つの施設を訪問した。まず、阪神淡路大震災の記念館である「人と防災未来センター」(神戸市)訪れ、実際の震災の被害の大きさや、避難所の生活、復興の様子等を学んだ。もう1つは「兵庫県三木総合防災センター」(三木市)で、そこでは起震車による震度7の地震や火災による濃煙から避難する体験を持った。また、災害に備えた食料や物資の備蓄庫を見学した。

③の「被災者になったことを想定しシミュレーションゲームを行う」では、2種類のシミュレーションゲームを行った。1つは『クロスロード(市民編)』を用いた。これは阪神淡路大震災時に実際に市民が体験した出来事の中から、どう対応するか判断する時に強いジレンマを感じたケースを選び、防災・減災教育に用いるために開発されたものである。一般日本人向けに作られているため、そのまま初級レベル学習者に使うのは難しいので、筆者らが簡易な日本語にリライトした。『クロスロード』は、学習者が本プログラムで震災や防災についての知識や体験を持つ前と、持った後との2回行い、学習者に各自自分の判断の変化や、クラスメートとの考えの違い等について話し合わせた。もう1つは筆者らが作成した『避難所シミュレーションゲーム』である。これは、阪神淡路大震災時に実際に避難所であったケースをもとに、筆者らが作成したもので、もし自分が被災し避難所生活を余儀なくされたら、避難所生活をより快適に過ごすには、どうしたらよいか考えるのを目的にした。クラスでは、3、4人のグループに分け、グループ毎にケースを与え、話し合いをした後、対応策を発表させた。

④「身近にあるものを工夫して被災時に活用する」では、ハンガーとアルミホイルを用

いてフライパンを作り、目玉焼きを焼き、牛乳パックを加工して作ったスプーンで食べるという活動をした。

3-2-4 課題とその手順

本プログラムでは、学習者にいくつかの課題を与えた。まず、プログラム開始直後に自己目標を作成させ、毎週その週の活動記録を提出させた。そして、最後に最初に立てた自己目標の達成度に対しての自己評価をさせた。さらに、最終課題として授業や体験のまとめとして、学習者3、4人と日本人学生サポーター2、3人で1つのグループとしてテーマを選び、それについて調査し、パワーポイントを用いて発表してもらった。発表までの流れを示すと、以下のようになる。

①グループでテーマを決める、②発表のアウトラインを考える、③原稿を下書きする、④スライドの構成を考える、⑤原稿清書とパワーポイント作成、⑥グループで練習、⑦全体リハーサル、⑧発表会、という順序である。各グループの意思疎通はできるだけ日本語を使用するように指示したが、支障をきたす場合は、英語、中国語、あるいは韓国語の使用を認めた。

3-2-5 評価方法

本プログラムの成績評価は、「日本事情Ⅰ」については、①「授業態度・参加」、②「提出物（活動記録・宿題など）」、③「日本語使用・コミュニケーション」、④「チームワーク」、⑤「発表原稿」の5つの観点、「日本事情Ⅱ」については、①「授業態度・参加」、②「プレゼンテーション」、③「発表スライド」、④「チームワーク」の4つの観点について、独自のルーブリックを作成し行った。（参考資料として「プレゼンテーション」のルーブリック（評価基準）を本稿の最後に付する。）

4. アンケート調査

4-1 調査概要

本プログラムの教育的効果を測ることを目的とし、「日本・日本文化学習」「防災体験学習」「日本の学生との協働」の3つに関するデータを収集する記述式アンケートを実施した。留学生が理解しやすいように、学習者の母語（中国語・韓国語・英語）で行い、プログラム開始前、中間、事後の3回、調査を行った。

4-2 調査結果・考察

4-2-1 日本・日本文化学習に関して

事前アンケートの調査によると、自国での日本に関する情報源は主にテレビやインターネットを通してであった。プログラムの中間アンケートでは、「来日前の日本とイメージが変わった」と23名中19名が回答していたが、やはりメディアを通しての情報だけでなく、実際に日本に来てさまざまな体験を通して学習することのインパクトの強さがうかがえる。

事前アンケートのコメントは、生活の利便性、交通、風景など外観に関わるものが多かったが、事後アンケートでは日本人の親切さに触れたことなど実際の体験に言及するものも増えた。

さらに事後の記述を比較すると、「イメージが変わった」というよりは、日本に対する理解度がより具体的になっているようであった。例えば、「日本の交通は便利だと思っていた（事前）。電車が時間に正確で、女性専用車がある等サービスが行き届いている（事後）」「来る前はもっと混雑していると思っていた（事前）実際に来てみると、混んではいるが、母国と変わらなかった（事後）」「日本人は礼儀正しい（事前）日本人は、質問しても丁寧に答えてくれる（事後）」など、来日前は漠然と捉えていた日本の状況やイメージが、今回の訪日を通して具体的な情報として理解されているようであった。

4-2-2 防災体験学習に関して

中間・事後アンケートで、本プログラムの「防災体験学習」について感想を聞いたが、次の2つを評価しているものが多かった。1つは「起震車での地震体験」や「火災の濃煙からの避難」のような「緊迫感が伴った体験」であった。もう1つは「シミュレーションゲーム」を通じて「被災者の体験の追体験」を持ったことであった。学習者は、被災者同様に難しい問題への対処を迫られ、ジレンマを感じながらもそこから自らの解決策を見出していた。

学習者は、事前アンケートでこれまで母国の学校教育において、先生が生徒を安全な所に誘導するといった形式の避難訓練を受けてきたと回答しているが、本プログラムが提供したような「緊迫感が伴った体験」や「被災者の体験の追体験」は初めてであり、本プログラムを通して、「防災・減災」への新たな視点を得たことがわかる。次のコメントは、参加者から実際に寄せられたコメントである。

台湾では毎学期地震と消防のクラスがある。1999年の地震で多くの人々が家族を失った。防災センターでの煙の中での避難体験は、とても的確で単に机上で教えるよりも实际的で意義があると思った。この体験プログラムは台湾でも見習うべきだ。物資の保管はとてもよく管理されており、印象深かった。危機意識を持って生活することが大切だと思う。

4-2-3 日本の学生との協働に関して

事後アンケートから「日本の学生は自分から人を助ける。そのような態度は見習うべきだ」「日本の学生は積極的に勉強する」「日本人の学生はとても友好的で、責任感が強い」「言葉が通じなくて、コミュニケーションに不便な私たちに対しても忍耐強く接してくれた」など、おおむね好意的な記述が見られた。また、協働を通して「日本文化についてさらに理解が深まった」とあり、留学生の本プログラムへの満足度がうかがえる。さらに「今の自分の日本語レベルは低い」「多くの課題について思ったように表現できなかった」や「完全にはコミュニケーションできなかったので、先に日本語をもっときちんと勉強しておく必要がある」という気づきも見られ、「日本語をもっと勉強したいと思った」と日本語学習への動機付けも促されたようである。

5. まとめ

今回、「若者ことば」「関西弁」などの日本における多様性理解 (Diversity/Global Learning),

「防災」「文化」などに関する調査 (Undergraduate Research) , 課題やプロジェクトでの日本人との協働 (Collaborative Assignments and Projects) などの能動的な教育実践を活動内容に組み込んだプログラムを実施した。

本プログラムを体験した留学生は、書道、華道、京都での着物体験などの日本の伝統文化を学ぶ一方、関西弁などの地域文化、最近のポップカルチャーなどの現代文化にも触れ、これらの学習や体験を通して、日本の歴史や文化に興味を持つなど、さらに日本への知的好奇心が高まったようである。また、実際に地震が起こった際の状況を体験し、震災の教訓を生かした防災の取組みについても学んだ。これらの体験学習は、留学生に実際に地震が起こった際、まず何をすべきか、どのような行動を取るべきかを認識させることができた。授業内外で学んだ知識と体験を総合化するために、『クロスロード (市民編)』や『避難所シミュレーションゲーム』を行った。これらは避難所生活を強いられた場合、実際に避難所で起きたケースを取り上げて、少しでも快適に過ごすにはどうしたらよいか、各グループで話し合い、対応策を発表してもらった。ほとんどの留学生は、日本の防災意識の高さや取組みを知り、日本は地震が起きても減災でき、安全だと感じられたようである。

最後に、それぞれのグループ調査のまとめとして、パワーポイントを用いて発表してもらった。「日本と私たちの国の違い」や「私が見た日本ー日本といろいろな国との同異」などのテーマで発表が行われ、これらには来日することでしか体感できないような内容が盛り込まれており、短期留学の成果が形となって表れていた。また、日本人学生との協働を通して、日本人に対する理解やさらなる日本語学習への意欲もわいたようである。

本プログラム終了後、留学生にプログラムについて評価してもらったところ、「とてもよかった」12名、「よかった」10名、「ふつう」1名、「がっかりした」0名という結果であった。日本語クラスに関しては「少し難しかった」と感じた留学生もいたが、文化や防災の体験クラスやフィールドトリップについては評価も高かった。

本プログラムを通して、留学生はより一層日本に興味関心を示し、再び日本を訪れたいという声が多くあげられた。日本の学生と交流する時間や日本語を使用する機会が多く、短期間で多くのことを学び、体験することで、留学生は非常に満足していた。

6. おわりに

実践研究フォーラムでは、「どうして初級学習者を対象にしたか」という質問を受けたが、ハイインパクト・プラクティスの初級での体験 (First-year Experience) に示されるように、初級学習者だからこそこのような体験・調査型のプログラムを通して学習することが、これからの日本語・日本文化学習にインパクトを与えることが将来への継続的な学習につながるという考え方にもとづいているからである。本研究は、多様化する日本語学習者と内向き志向の日本人学生の両方にインパクトを与えることを目的として実施した。留学生の日本に関する情報源は、来日前はメディアを通しての漠然としたものであったが、プログラムが進行するにつれて、日本の現状を認識し、多様な文化に接し、防災体験や日本の大学生との協働学習を通して、新たな知見を得たようである。また、更なる日本への興味関心を持ち、日本語学習の動機付けを高めたようである。

日本の学生においては、留学生との協働学習に参加することで、外国人とコミュニケーションをとる難しさを感じつつも、それ以上に交流する楽しさを実感したようである。しかし、今回日本の学生についての具体的なデータは収集していないため、今後の課題とする。なお、本プログラムは改善を加え、2012年度7月に再度実施したので、それについては次の機会にデータをまとめ、発表していきたい。

注

(1)このプログラムは、平成23年度文部科学省留学生交流支援制度（ショートステイ）の支援のもと実施された。

参考文献

- (1)米澤彰純（2011）「大震災後の留学生政策をどう再構築するか」『留学交流』Vol.1, 1-6
- (2)「アジア学術共同体の基盤形成をめざして」東アジア共同体の学術基盤形成委員会日本学術会議東アジア共同体の学術基盤形成委員会
<<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t135-3.pdf#search>>（平成23年（2011年）9月30日）
- (3) Kuh, G. D. (2008) *High-Impact Educational Practices: What They Are, Who Has Access to Them, and Why They Matter*. Washington, DC: AAC&U.

【参考資料：「プレゼンテーション」のルーブリック（評価基準）】

項目	大変素晴らしい	おおむねよい	不十分	かなりの改善が必要
わかりやすさ 発表時間と 話すスピード(8)	よどみのない話し方で、指定時間がほぼ守られていた。(8)	大体よどみのない話し方だが、フィラーが多少あった。(6)	少しよどみがある話し方で、聞き取りにくい言葉も多少あり。(4)	発表の時間が守られておらず、言葉も聞き取りにくい。(2)
声の大きさ(8)	会場の広さに合った適切な声がコントロールできており、間も効果的。(8)	後部座席まで聞き取れる声の大きさ。(6)	後部座席まで聞こえず、中程の座席まで。(4)	前席にしか聞き取れない声の大きさ。(2)
姿勢・表情・アイコンタクト(8)	リラックスしたよい姿勢と表情で、会場全体を見渡すことができ、ジェスチャーも効果的。(8)	無駄な動きをせず、会場に目をやりながら発表できていた。(6)	やや発表にゆとりが見られず、手元の原稿ばかり見ていた。(4)	会場に目をやらず、手元の原稿を読むので精一杯な状況。(2)
グループ発表(8)	発表の流れがスムーズ。まとまりがある。(8)	発表の交代時にスムーズ感がやや欠けるが、まずまずまとまっている。(6)	発表の交代時にスムーズ感が欠ける。まとまり感もやや欠ける。(4)	発表の交代時にドタバタしていて、聴衆に不快感をもたらす。(2)
スライドの見やすさ(20)	スライド1枚当たりの文字量やサイズが見やすい。イラストや写真も効果的。(20)	スライド1枚当たりの文字量が適当で、イラストや写真も使用。(16)	スライド1枚に文字を詰め込みすぎ。あるいは余白が多すぎる。(12)	スライド1枚に文字を詰め込みすぎ。あるいは余白が多すぎる。工夫が全く見られない。(5)

() の数字は評価点